しあわせかぞく

遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
しあわせかぞく

【Ｎコード】
Ｎ７０７１Ｂ

【作者名】
遼

【あらすじ】
親子ほども歳の離れた兄妹が、許されない恋に挑むかも知れない。正直スッキリしない終わり方です。

実際言われるとかなり生々しかった。

「妹ができたわよ」

実際言われるとかなり生々しかった。

別にそういいもんじゃない。

大学入って間もない俺に突きつけられたのは、父さんの単身赴任先についていってた母さんに、娘ができたという話。要するに俺の妹だ。

それだけじゃない。忙しくて子育てのできない両親に代わって由梨（妹）を育てろとか言い出す始末だ。俺だって入学後の手続きやイベントで大忙しだっての、なんて言い訳が通用するはずもなく、一時的に実家に帰ってきた母さんから渡された、ほんの七十センチ

ばかりの女の子。実際は六十五しかなく、一歳の女の子としてはかなり小さな部類に入るらしい。

大学の勉強などする暇はなく、その代わりに育児の勉強を強いられることになった。何しろ、やることはたくさんある。

まず離乳食。一歳になり完了期に入ったとはいえ、それに気を配るのも親の役目。歯は少しずつ生え揃ってきて、意外に固いものも食べられる。山芋なんかを焼いたりすると喜んだ。ただ、卵アレルギーが酷く、俺のレパートリーの大半は削られてしまったのだ。くそぅ、卵買いにくくなったじゃないか。栄養バランスとかその他、項目別に分けたらきっとレポートが作れる。毎食後の歯磨きなんかもここで習慣化させなくちゃいけないらしい。他人の歯を磨く日が来るとは思ってなかったし、思ってた以上に難しかった。

由梨は、まだ歩けない。だからまだ四つんばいでよちよちと這い回る程度。それはそれで可愛いが、それはそれで大変且つ鬱陶しい。その辺で遊ばせとくと踏みそう、というか四六時中構ってないと拗ねる。厄介極まりない。それにこいつの手の届く範囲に危ないものを置いちゃいけない。放っておくと何でも口に入れるから、特に小さいものには細心の注意を払った。パソコンは高い机に置きなおした。これを壊されたら堪ったもんじゃない。

育児の何が大変かと問われたら一番最初に出てきそうな、排泄の問題。やはりこれは重かった。放っておくとおむつが蒸れるし、くさいし、何より由梨は全然泣かない子だったのだ。頼むから泣いてくれと、何度思ったことか。それにそう、クソの野郎、あなーるどころか性器の方まで入り込むことがあってだな、まさか初めて見る女性器が妹、しかも一歳児のものだなんて誰が予想したか。

鼻水は自分でとろうとしない、というかとれない。だから俺が仕方なくティッシュ……じゃ、ダメ。ティッシュじゃ固すぎるらしく、もっと柔らかい布をお湯で濡らしてやるといいとかいう話だ。しかしもっと小さい子の場合、その後吸ってやるらしい。一歳まで育ってくれてよかった。

睡眠に関しちゃ由梨は優秀だった。これだけが救いだ。寝る子は育つっていうし、何より寝顔は果てしなく可愛かった。この為に育児してるって言っても過言じゃない。

意思疎通はだいぶ。「あー」とか「アッー」とか、言うようになりました。

その代わりと言ったらなんだけど、その、俺のことを、ええっと、「ぱぱ」と。

勘弁してくれ。ここに来るまでにパパに相手してもらってたでしょ？　忘れるな、パパはいなくて、俺はお兄ちゃん。くそぅ、何か屈辱だ。

もちろん目が離せるわけもなく、かといってベビーシッターに頼めるでもなく、大学に連れて行く毎日。泣かない由梨は外に出るといい子に見えるらしく、いい見世物だ。

情報学部情報学科。何をするかはまだ決めてないから、曖昧に情報という学科を選んでおいた。とりあえずパソコンを触っていたかった、という理由だけで選んだ学科だ。

キャンパスはそう広いわけじゃないが、そこら中に精密機械が置いてある為、快適といえば快適だった。まあもちろん、由梨が来るまで、だが。

由梨は泣かないが、やんちゃだった。講義中も抱っこしてやらないと、這い回って色々弄くっている。一度学校のＰＣを壊されそうになって肝を冷やしたが、そんな時はしっかり叱ってやった。もちろん泣いた。まったく、子供ってのは厄介極まりない。

「でも可愛いよねー、由梨ちゃん」

「可愛いけどね……そういうならよっぽど静名の方が可愛いよ」

「やだなあ、そんなこと言ってぇ。照れる照れない以前に、ベクトル違いすぎ」

「あぅー」

「あー可愛いー。洒落んなってねぇなーこれー」

誰にでも懐く。わけもなく、この由梨という女は生意気にも人間を選り好みした。特に懐いたのがこの静名という女で、顔が近づくと手を伸ばして呻いたのだった。
もちろん俺の腕を離れることなく、だが。
「この服、たけが選んだの？」
「ああ、すっげ恥ずかしかった。夏だからノースリーブー、とか言おうとしたら怒られたし」
「あはは、腋に汗が溜まるんだってね。でもセンスはいいよ」
「ありがと。というかお前、よくそんなこと知ってるな」
「これでも女だからね、いつか役立つでしょ。それともたけ、子作りする？」
冗談にしても性質が悪すぎる。肩を竦めると、静名は声を上げて笑った。
柔和な顔つきに似合わず、意外と遊んでる女だ。付き合ってきた男の数は両手じゃ数え切れず、次のターゲットを既に狙っているとか。俺じゃないことを願うばかりである。
「ご飯は？　どうする？」
「今から学食。こいつには弁当持ってきてある」
「たけが作ったの？」
「他に誰が作るんだよ？」
「はー、すご、立派なママだね」
「冗談。それに俺はあくまで「お兄ちゃん」だ」
「ぱー、ぱぱー」
「……」
「へー？　お兄ちゃん、なんだ？」
いい笑いモンだ。どうしてこう、絶妙なタイミングでそういう発言をしてくれるかな、この子は。ちょっとした復讐のように頬をくりくりと弄ったやったら、由梨のやつは逆に喜んでみせる。ああ、子供ってのはどうして大人の思う通りにならないかな。
それでも、まあ、可愛いと思う。

「たけ、絶対虐待とかしなさそう」
「笑えない冗談はやめてくれ。そんな人間の最底辺にはなりたくないっつの」
「だよねー。そんなら産むな、って感じだよ。私みたいにね、避妊をしっかりすべきだ」
「あんまり由梨の前でそういう話するなよ」
「たけ過保護、気持ち悪ー」
つくづく教育によくない女だ、静名は。
「俺、行くから。ついてくんなよ」
「あーい。由梨ちゃんのご飯、食べちゃダメだぞー」
「誰が！」
そんな口汚い俺を窘めるように、由梨は一度だけ俺を呼んだ。
当然、「ぱぱ」だ。

可愛い子には旅させよ、なんてことわざがあったと思う。例えば俺が由梨を可愛いと思っているとして、俺は旅に出すだろうか。
答えは簡単。否、だ。
厄介にしろ鬱陶しいにしろ、俺はこいつを離す気はなかったし、実際二十四時間ほとんど構いっぱなしだった。寝る時は潰したらいけないから別の布団に入ったが、それでも隣。飯を食う時はもちろん、課題をする時もＰＣに向かう俺の膝に乗せていた。暇な時は友人の誘いも断って、由梨と遊んだ。
楽しかったんだ。大変だけど、愛しかった。
母さんに言われた時は何の冗談かと思ったけど、やはりこいつは俺の妹で。血の繋がった、家族なんだよな。父さんも母さんももう五十、爺さん婆さんみたいな年齢だ。だから俺のこと「ぱぱ」って呼ぶのも、あながち間違いじゃないんだろう。
「由ー梨ー、積み木積んでやるぞー」
「……」
なんて言っても、由梨は喜ばない。

「由梨、抱っこだ」
「あ、あうー、あー」
こうしてやると、由梨は必死で俺の方に向かってくる。玩具よりもずっと、俺との触れ合いを求めていた。だからだろうな、余計に愛しかった。
その小さな身体を抱き上げて、ソファに腰を落ち着けてみる。さっきまでＰＣと向かい合ってたせいか、妙に肩がこる。
「でもやっぱ、由梨は軽いな」
「？」
首を傾げる由梨を笑い、その手を取った。小さな手だ。
俺はこの手を取って、これから生きていく。父さんと母さんは、まだしばらくは帰らない。だから、俺は、この手をずっと離さない。
由梨が二歳になって三歳になって、俺の手を必要としなくなっても、俺は由梨を見守り続けていくんだろう。由梨から離れていく時、きっと大泣きするんだろう。
そんな日を少しだけ想像してみて、微かに笑ってみた。
まだ、この子には早い。

就職して七年、仕事もだいぶ板に付いてきた。
結局情報学部で勉強したことなんて何の役にも立たず、俺は普通の商社に勤務することになった。不勉強が祟って、出世とは縁のない窓際一直線の男だ。
許せないのが、上司、係長の、柊だ。俺のことを顎で使うのは構わないけど、何よりその名前が気に入らない。
「柊係長、書類上がりました」
「やだなぁたけ、学生時代みたいに名前で呼んでよー」
「……静名、一応社内では大人しくしててくれよ」
柊静名。俺の同期ながらも、その能力が買われてあっという間に出世コースに入ってしまった女だ。何を隠そう、由梨が一番懐いたあの女に相違ない。

「だってさ、私人望ないし。たけだけが私の味方なのよー」
「冗談を。男なら誰でもついてきてくれるだろ？」
「あー……それはまた別。本命は一人でいいでしょ、ね？」
「俺、本命？　冗談じゃない」
「なんだよー、私も結婚に焦る時期なんだよー」
だったら“俺以外の”男とよろしくやってくれ。
大体、俺なんかじゃ満足できないくせに。収入は低く、その上そのほとんどは育児費用に中てられる。生活費すらままならない状況の男を、こんな出来る女が選ぶわけがない。
父さんと母さんが死んだ。過労だかストレスだかで倒れて、そのまま帰らぬ人。俺の許可だけを契機に単身赴任先で燃やされた両親のことを、由梨は顔も覚えてないそうだ。もしかしたら、それがわかってたから両親は由梨を俺に預けたのかも知れない。不自然だったんだ、娘をこんな風に預けるなんて。
だから俺が、由梨の本当の「ぱぱ」になった。
当然だ。遊ぶお金なんてどこにもありはしない。
「由梨ちゃんのこと、気になるの？」
「当たり前だ。俺以外に、頼れるやついないし」
「私を頼ればいいよ。由梨ちゃんのこと好きだから」
「……あいつは、きっと認めないよ」
「本人に聞いて」
本人に聞いて、どうなるか。簡単に想像がつく。
口だけで認めて、心の奥にストレスを溜めてしまう。ストレスという言葉に敏感になった俺は、それが怖いんだ。我慢なんて、させちゃいけないんだ。
「だめ？」
「駄目。どうしてもっていうなら、由梨を泣かせてから言ってくれ」
笑わせてから、じゃない。泣かせてから。
だってそうだろ。笑うのは簡単だけど、泣くのはとても難しいんだ。心で泣いて顔だけで笑ってたら、きっと由梨は駄目になる。

「由梨ちゃんを泣かせる？　そんなの、簡単じゃん」
「なにが？」
「わかってるんでしょ？　たった一言で、由梨ちゃん大泣きだよ」
「……」
わかってる。けど、わからないふりをしている。
実際聞くと、すごく生々しかったのを覚えてる。今でも時折、由梨は思い出したように言ってくるんだ。それが真摯な態度だから、嘘でないとわかる。
それなんてエロゲ？　の世界だ。
でも仕方ない。それは社会的人間的に認められていないから。
「あーもう、だったら今度泣かしに行くよ？」
「……好きにしろ」
そろそろ、潮時だ。

「ただいまー」
ドアを開けて声を発すると同時に、廊下の奥からどたどたと騒がしい音が鳴る。
「ぱーっ、ぱー！　おっかえりなさーい！」
とんっと軽い音が最後に鳴り、そして身体に衝撃。
受け止めて腕を回すと、それは爛漫な笑顔を俺に向けてくれた。
午後九時の疲れを癒すのに、十分な笑顔だ。
「今日も元気だな、由梨は」
「うんっ！　おかえりなさい、ぱぱ！」
「ああ、ただいま。ご飯は食べたかな？」
「まだ！」
「先に食べてなさいって言っておいたのに……仕方ないな」
「一緒に食べるの！」
ブラコン、って言っていいのかな？　それともファザコンって言うべきなのか定かじゃないけど、由梨の俺離れは終ぞ訪れることはなかった。あの時と同じように、俺に抱っこされるのが至上の喜び

だそうだ。
ぱぱ、というのはもう訂正するのはやめておいた。授業参観だって、もちろん俺が欠かさず行ってる。
親を知らないからこそ、寂しい思いをさせてはいけない。
「ぱぱ、早く食べよ」
「はいはい、行くからそんなに引っ張るな」
当年とって十になった由梨は、子供の頃と同じように小さなままだった。身長だって、クラスで一番低い。その代わり、元気だけはあり余っているようだ。
「レンジで温めるだけー。ぱぱのお料理いっとうしょー」
「なんだよ、その歌。由梨、外で変なことしてないよな？」
「しないよー」
いい子でなくてはならない。子供にとってそれがどれだけのストレスになるか。由梨は結局、我慢していた。だからせめてウチの中でくらい、のびのびさせてやりたい。だから俺は、静名を受け入れられないんだ。
俺一人が一番なんて言わない。母親はいて当たり前の存在だ。
でも、だから迷っていた。
「ぱぱの分もね、作っちゃったよ」
「……いつもごめんな」
「料理覚えるの、楽しいから」
こんな歳で料理を覚える必要なんて、ないのに。
「由梨、今度静名連れてきていいか？」
「……うん」
そう、由梨はあの頃から静名を遠ざけていた。嫌っているわけじゃなく、敵視している感じだろうか。理由は言わずもがなだ。恐らく静名が遊びに来たところで、由梨は部屋に篭ってしまうんだろう。
でも必要だ。由梨には、愛してくれる女性が。
由梨が俺のことを「愛してる」といったのは、つい二ヶ月前のこ

とだ。
一緒に寝るといって聞かなかった由梨が、その日は自分の部屋に篭っていた。疑問に思わないはずがなかった。由梨はそうやって、部屋に誘っていたのだろう。
由梨の部屋は暗かった。電気どころか、月明かりの一つも入ってこない。
そんな暗がりの中に、更に暗い影。十歳という年齢の体躯では、そんなに大きな影を作り出せるはずがなかった。それなのにその日の由梨の影は、特別大きいように思えた。
立ち上がり、俺の方を向いた由梨は、眼から大粒の涙を流していた。焦る俺の方を向いて、それなのにただ笑っていた。親指で、それが間に合わなくなったらハンカチを取り出して、必死に涙を拭ってやった。けど、尽きることなく泉のように溢れてきて、由梨は一度だけ嗚咽した。
気持ちに気付いた。気付いてしまった。
由梨はそういって、俺の胸に飛び込んだ。何度も何度も嗚咽して、俺のパジャマに涙を押してつけてきた。
染み込んでくる涙を感じながら由梨の頭を抱き、懸命に宥めてやる。まだ由梨の気持ちには気付いていない。
泣き止むころには、由梨は笑顔を失くしていた。俺が微笑みかけると、作るのに失敗した笑顔をぐしゃぐしゃに歪めて、また涙を一つ零した。もう止められないらしい、なんて悟った頃には、由梨が何を言いたいのかわかった気がしていた。
言わせちゃいけない。ここは逃げるべきだ。
でも、そうできなかった。由梨の目に縛られていた。
「ぱぱ……じゃない――健さん」
決定的だ。
それは「愛してる」なんて言葉じゃなかったけど、精一杯の気持ちだったんだろう。

「好きです。ぱぱじゃない、お兄ちゃんでもない、健さんを」

続く

ささやかな幸せを

「俺も好きだよ、由梨」

ささやかな幸せを

誤魔化す以外の選択肢など、あるはずもなかった。それは男として最低の選択なんだろうけど、兄として最善の道なんだ。だから涙に濡れた頬に軽く口付けて、言ってやった。

「俺も好きだよ、由梨」

続けて、

「遅いから、もうおやすみ」

肯定による拒絶だ。恐らく一番無難で、一番由梨を傷つける言葉なんだろう。でも、現実を教えてあげなくちゃいけない。由梨は「

男として」といったけど、家族にそんな性差を持ってきてはいけないんだ。家族は個。家族は全にして一。親愛という情以外で結ばれることは、有り得ない。
由梨は、少しだけ呆然とした後、俺をキッと睨みつけた。いくら十歳でも女は女、俺が何を言ったかくらい理解できてる。
「健さん、由梨は――」
「どうした？　ぱぱって呼んでくれないのか？」
「だって……！　聞いて、聞いてください！」
「聞いてるじゃないか。そんなに、睨まないでくれよ」
枯れた涙が、また湧いてきた。罪悪感はないわけじゃない。俺だって由梨を泣かせるのは不本意だけど、他にどうしろっていうんだ。
敬語はやめてくれ。それだけ言うと、由梨は黙って俯いてしまった。涙だけを零して、他の何もかもを心に封じてしまったような気がする。これもまた、由梨にストレスを溜める原因になるんだろうか、なんて考えてからすぐにやめた。無益なことはするものじゃない、まして由梨の勘違いを肯定するなんてあってはならない。
勘違いなんだ。こういう思春期の子供にありがちな、親愛の履き違え。好きという気持ちをまだ深く理解してないから、家族に対するそれを「恋」と勘違いしてしまう。
それだけだ。
「聞いて、よ」
ぽつりと落ちたような、小さな呟き。
「好き、だもん」
零れているのが、女としての感情なのか、子供としての我が侭なのか。それはきっと、決められるものでもないんだろう。
「何でも、できるもん」
「何でも、なんて軽々しくいうもんじゃないぞ、由梨」
「軽くない……せかいいちだもん」
ため息一つ、由梨の頭を撫でてやった。
無意識よりもっと奥で、疼く感情。それが親愛なのか恋慕なのか、

俺にはよくわからないけど。でも、きっと。
「ほら、何でも」
パジャマのボタンを外して、少しずつ露になっていく由梨の白い肌。
大胆なことをと、驚くとでも思ったのだろうか。劣情を抱くとでも、勘違いしたのだろうか。確かにこのシチュエーションは男としてくるものがあるけれど。
「由梨のおっぱい、少しずつ膨らんできたよ」
ああ、そうだったな。
お前は、馬鹿だよ。俺がいないと何もできない。俺がいないと、何も知らないんだな。
「由梨、いつもお風呂で見せてるのは誰の裸だ？」
「……だって」
「わかったらさっさと服着て、寝なさい。それとも一緒に寝るか？」
ああ、そうだ。
俺も、馬鹿なんだ。他にもっと言い方があるはずだ。由梨がいないとまともに働けもしないくせに。由梨がいないと、まともに生きられもしないくせに。でも、優柔不断よりずっとマシだろ。受け入れられないもんは、拒絶する以外にないだろ。
仕方ない。もし仮に俺が由梨に恋していたとして、それがハッピーエンドに繋がるか？　答えは簡単。ノーだ。
「健、さん……」
「いい加減にしなさいッ！」
「っ！」
「ぱぱ、だろ？　それが駄目なら、お兄ちゃんだ」
「……ごめんなさい、……ぱぱ」
一粒だけ残った雫を落として、由梨はしゃがみこんでパジャマを掻き集めた。
それを身に纏う頃には、すっかり涙も枯れてしまったようだ。笑顔なんて、もちろん浮かべられるはずもない。

一緒に寝るか？　うん。
その日俺のベッドの上で、由梨はずっと俺の胸に抱かれていた。目を閉じて黙っていると微かに聞こえてくる嗚咽が、少しだけ痛かった。

静名を家に呼んだ。
彼女にしてみれば大きな家、だけどもう、その主は二人しかいなかった。人生を賭けてお金を払い続けた俺の大好きな二人は、たった一つの命を残して旅立ってしまった。だからこの命は、俺が導いてやらなくちゃいけない。
静名はよく笑う、快活な女だ。俺と同い年とは思えないくらい多弁で有能で、ずっと母性に溢れてる。当たり前といえば当たり前、俺は男なんだから。
それがどうしても、悔しかった。
俺は兄で、俺は父親で、俺は母親で。俺は由梨にとっての全てでなくちゃいけない。そう信じ続けて、今までやってきた。だから、たぶんそれが間違いだったんだと思う。母親は、やっぱりいて当たり前。由梨には、足りないものがありすぎた。
キッチンに立つ女。掃除をする女。洗濯をする女。頭を撫でてくれる女。一緒になって話し合える女。馬鹿みたいな相談をできる女。恋を打ち明けられる女。そしてそれを否定してくれる女。どいつもこいつも、女、女、女だ。
悔しいさ。だって俺は今でも、由梨の全てなんだから。
「静名さん、ぱぱってお仕事頑張ってるの？」
「そうだねー。頑張ってるけど結果は伴わないから、いまいちかなー？」
「そんなー……でもぱぱのお仕事、かっこいいよね？」
「かっこいいよー。お姉さん、いつも蕩けるような眼で見てるの」
よく笑った。由梨は簡単に静名を受け入れた。
あの日、二ヶ月前。一緒に寝てからその翌日には、由梨はいつも

以上に笑顔を見せてくれるようになった。代わりに少しだけ我が侭になって、少しだけ熱っぽい視線を俺にくれるようになったけど、それはそれで。

我慢なんてさせちゃいけない。でも、我慢させなくちゃいけない。怖い。ストレスが引き金で俺の前からいなくなってしまったあの二人が、どうしても脳裏に過ぎる。由梨もいつか俺の元から去ってしまうような、恐怖を超えた恐怖が、ずっとずっと、ずっと絶え間なく襲ってきた。

「静名さんのお料理、美味しい」

「ぱぱの方が美味しいでしょ？　ぱぱのお料理、私も食べたことあるんだー」

「うんっ！　ぱぱのお料理は、いっとうしょうなの！」

「だよね。私がここに来たら、食べれなくなっちゃうのかな」

「静名さん、ここに来るの！？　わーい！」

「可愛いなー、由梨ちゃん」

ああ、どうして笑うんだ。静名に頭を撫でられながら、どうしてそんなに愛想を振りまくんだよ。本当は、……そうだな、由梨は静名のこと、昔から好きだったもんな。そうだ、昔に戻っただけ。今までが、少しおかしかっただけなんだ。

「私はママになるのかな？　それともお姉ちゃん？」

「まま！　ぱぱの奥さんだから、もちろんままだよ！」

「そっかー……いい響きだね、ママ」

必要だろう。ママは、いて、当たり前だ。

「たけ、言うことない？」

「ああ、後でな」

「泣かせた方がよかった？」

「……いや、もういい」

その夜、由梨を家に残したまま二人でホテルに行って激しく抱き合い、そしてプロポーズをした。たった一言、静名は大袈裟に喜んでみせてくれた。

「由梨のお姉さん――ママになってやってくれ」

静名は会社を辞めた。当然の決断であるかのように辞表を出し、代わりに俺の家に永久就職することになった。まったく、中間とはいえ、管理職の重要性を理解してるんだろうか、なんて愚痴る権利は俺にあるはずもない。同僚からは、憐れみ半分、やっかみ半分。どちらが女でどちらが男かは、考えるまでもなかった。

代わりに係長に就任した男は、以前から静名を嫌っていたようだった。「どうせ身体でも売ったんだろう」なんて露骨なセリフを、社内で公言してみせるくらいだ。

馬鹿なやつ。そいつはやはり、男女問わず同僚全てから嫌われていた。

関係ない。俺はできないなりに仕事をするだけだ。俺のおかげで会社から静名がいなくなったんだ、感謝されても嫌われる謂れなんてありゃしない。

いつも哀れむように嫌味を言われた。「あの女と一生一緒なんて、お前もご苦労だな」だとか、「お前もあいつの身体目当てか？」だとか、「それともあいつから迫ってきたのか」なんて。苦笑しながら、内面で嘲笑してみせた。そんな下らないこと気にしてるから、お前は静名に負けたんだ。

でも、痛かった。

静名、怖かったのかな。家族、ホントに欲しかったのかな。

ＰＣの電源を落としたのは、いつも通り俺が一番最後だった。

「おかえりなさい、旦那さまっ」

「だんなさまっ」

家に帰るなり迎えてくれる、愛しの家族たち。

「何の真似だ？」

笑ってくれる家族というのは、いいものだ。

「新婚さんごっこー。気分よくない？　今まで上にいた女が頭下げ

てるの」
「しんこんさんー。ぱぱ、由梨、ままのお料理手伝ったよ」
偉い偉いと由梨の頭を撫でてから、三つ指をつく静名に視線を落とした。当然、呆れてる。こいつは何歳になっても、子供心を忘れないんだな。学生時代と変わらないのなら、浮気だけはされないようにしないと。
そんなことされたら、由梨が可哀想だ。
「さ、食べよう食べよう」
「なんだ、お約束はなしか？」
どうせなら、俺も笑わなくちゃ。由梨だってそれを望んでるはずだ。
「ほほぅ、たけもやるもんだ」
「なになに？　ぱぱ、まま、何するの？」
「あなた？　ご飯にする？　お風呂にする？　それとも――」
艶っぽく微笑んで、少しだけ照れながら、静名は呟く。その若々しい容姿もあって、不覚にもくらっときてしまった。やはり男心をくすぐるような仕草を熟知しているらしい。複雑。
「――わ、た、し？」
「あははー！　まま、変なのー！」
「へ、変！？　しょっくー、精一杯色っぽくしたのにー」
静名は俺のものになった。でも俺は俺のものでなく、由梨のものだ。
だから、由梨を悲しませるようなことだけはしないようにしないと。静名も、わかってるだろ？

静名と由梨が喧嘩したらしい。俺の仕事が休みである土曜日だというのに、二人共自分の部屋に篭って出てこなくなってしまった。というか静名、お前の部屋は俺の部屋だから、閉め切るのはやめてくれないか。
あーあ、せっかく三人で遊ぼうと思ってたのに。ドアを叩いてか

ら、結局無断でそれを開いた。
「由梨、どうしたんだー？」
言葉は返ってこない。その代わり、ベッドの上のふくらみが大きくなって、顔の半分だけが俺を向いた。目を真っ赤にして、髪もぼさぼさだ。
「ああ、どうしたんだよ。可愛い顔が台無しじゃないか」
「……」
慌てて駆け寄って、髪を手櫛で整えてやった。艶やかというよりは軽やかなその美しい髪が自分の思いのままになると、少しだけの優越感に浸れる。それだけが理由じゃないけど、だから由梨の髪は大好きだった。
「静名に何かされたのか？」
首を横に振って、由梨は俺を見上げる。
「何か言われた？」
また横に振る。
「じゃあどうしたんだよ。言わなきゃわかんないぞ？」
「なんでも、ないもん」
「何でもないことないだろ。そんなに目を腫らして」
「なんでもない」
埒が明かない。もしかしたら俺から離れていく時期なのかも、なんて思って笑ってみた。ただ少しだけ悩んでるだけだ。きっと子供らしい、可愛い悩みなんだろう。だってほら、撫でられてるのに離れようとしない。まだ甘えることを知ってる時期だ。
可愛いセミロングの髪。由梨から見て右側で、一つ括りにしてる。
「なんだ、ぱぱにも話せないことなのか？」
「……」
「隠し事、したら駄目だろ？」
「ぱぱ」
「どうした？」
「ぱぱ」

「由梨？」
「ぱぱ……」
由梨はまた泣いた。あの時と一緒の涙だ。
そして、また言われた。
「ぱぱ、好き」
あの言葉を、同じように、だけど……
「ぱぱ、大好き」
俺のことを、健、なんて呼ぶことはなかった。
「だから、ひとりにしないでね」
問答無用で静名を叱った。案の定、静名は「私に夢中になる」なんてことを、由梨に吹き込んでいたのだ。しゅんとする静名を、由梨は「してやったり」みたいな顔で笑ってた。
安心したか？　由梨、俺はお前を独りになんかしないぞ。

結婚式には、余り人を招待しないようにしておいた。せっかくの晴れ舞台に申し訳ないけど、静名の両親にも辞退願った。一生に一度の晴れ舞台なのに、なんて恨み言を言われたけど、静名が説得してくれた。「新婦側の親だけいるのは、不自然でしょ」なんて。
ささやかなものだ。同僚と学生時代の友人、それだけ。両手で数え切れる。
小さなチャペルで、神父さんの目の前で。ウェディングドレスを纏った静名は、予想以上に綺麗だった。その白いヴェールは、静名を隠すよりもずっと、美しく見せてくれた。
これからこの人とずっと一緒に生きていく。ああそうさ、愛していく自信はある。
「健やかなる時も病める時も、貴方は新婦を愛することを誓いますか？」
「誓います」
指輪の交換は先に済ませた。式はキスで幕を下ろしたいとの、静名の希望だ。

「健やかなる時も病める時も、貴女は新郎を愛することを誓いますか？」
横目に見た静名は、小さく笑いながら、幸せそうな顔だった。本気にしてよかったんだな、俺が本命だって。俺、ずっと冗談だと思ってたんだ。
「誓います」
そういえば、俺と出会ってから一度も、静名が誰かと付き合ったって話を聞いたことがない。あの時からずっと俺一筋だったってことか？　誇っていいのかな。あれだけ遊んできた静名を夢中にさせた俺って、実はすごい男なのかも。
ああ、この人の全てになりたい。そう思わせてくれるだろうか。まだ、そんな段階に達しているわけじゃないけど、せめて愛していきたい。
結婚式でこんなこと考えるのって、不謹慎かな。でも、まだ君は僕の全てじゃないんだ。
「では、誓いのキッスを」
捲ったヴェールの向こう、はにかむ静名。
「綺麗だ、静名」
「や、やだなぁ」
言われ慣れないことを言われたように、静名は顔を真っ赤にして照れてみせてくれた。これじゃ綺麗というより、可愛いだぞ。まったく、二十八にもなって。
近づいてくる顔。綺麗で、端整で、真っ白な顔の下の方に、赤く美しく色づいた唇。瑞々しくて、ああそういえばこれ……
ファーストキスだ。
目は閉じない。だって見えなくなってしまうから。
「ん……」
小さく聞こえた呻き声は、静名のだったか俺のだったか。
拍手が聞こえた。チャペルを包み込んだ祝福の声。横目に見える客席。友達は皆中てられたように微笑み、そして静名に遊ばれた男

は少しだけ複雑そうだ。静名、そんなやつら結婚式に呼ばないでくれよ。
そして最後に目を遣った。静名のウェディングドレスの後ろ、引き摺らないように持って来る人、なんて言うんだったっけ？
小さく微笑むその子を見て、俺も小さく微笑んだ。キスしながらだったけど、気付いてくれただろうか。ぱぱの、お兄ちゃんの門出に涙も浮かべず、ただ微笑み拍手をする君は、少しだけ不孝者だぞ。少しくらい泣いてくれよ。
でも、彼女はずっと微笑んでいた。
式が終わって、外でブーケを投げて、披露宴を終えて二次会やって、家に帰って、そしてそれから先もずっとずっと、君は微笑んでいてくれた。
君は俺の全てだから。せめて小さな幸せを。
ずっと微笑んでいられますように。せめて俺の胸でくらい、泣いてくれますように。
願いはいつも叶うわけじゃないけれど。君はずっと笑ってばかりだったけれど。
君が誰かと一緒になる時が来たとしても。いつか俺の元を離れていく時が来たとしても。死が二人を別つ時が来たとしても。
君は俺のことを好きでいてくれるか？
そしたらきっと、俺も君のことが好きだから。
涙を忘れてしまった小さな女の子に、せめて――
――せめて由梨に、ささやかな幸せがあらんことを――

終わり

ささやかな幸せを（後書き）

変態ちゃうわっ
主張しておきます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7071b/

しあわせかぞく

2010年10月8日15時43分発行